

研究タイトル：

日本語と英語の談話の対照比較



氏名：	塚本 亜美 / TSUKAMOTO Ami	E-mail：	tsukamoto@gen.niihama-nc.t.ac.jp
職名：	准教授	学位：	修士（応用言語学）
所属学会・協会：	社会言語科学会, 日本語用論学会		
キーワード：	談話分析, 社会言語学, 英語		
技術相談 提供可能技術：	・日英翻訳		

研究内容：日本語話者と英語話者による談話の対照比較

一般的に、談話、特に討論のように議論を展開する場では、日本人より欧米の方が雄弁であるようなイメージが持たれている。欧米人、殊に英語話者は積極的に自分の意見を主張し、相手の意見に遠慮なく反論するように考えられる。先行研究によると、日本人の言語行動の特徴は、聞き手が話し手の発言にあいづちなどを打ったりして、協調的な会話を展開する傾向が強いとされる。日本人が相手に気を使った「共話的」な会話をすると論じられている(水谷1993)。そこで、申請者は日本語話者と英語話者の談話を録音して比べてみることで、本当に両者の間にそのような差異が見られるかどうかを確認しようと試みている。

本研究では、日本語話者と英語話者に同じピックを与えて討論させた場合、はたして両グループの間にどのような発話態度の違いが見られるのかを実験し、その結果から、参加者の文化的背景や職業、性別が発話態度にどのように影響するのかを考察してみる。申請者は過去にこの手法を用いて実験を行ったことが三回あり、談話における英語話者の積極性や攻撃性、日本語話者の大人しさや協調性を観察してきた。

申請者はこれまで英語話者の国籍を限定していなかったが、日本語話者と比較する対象をアメリカ人に絞ることで、英語話者の言語行動に共通して見られる特徴に統一性を見出そうとしている。同じ英語話者といっても、国籍が違えば文化的な背景が言語行動に及ぼす影響も変わってくるはずだ。

メイナードの研究においても日本人とアメリカ人の談話を比較しているが、彼女が形成したグループは様々な年齢層からなる構成となっており、日本人グループの中では年長者と年少者の間の上下関係が発話表現に影響することが観察された。申請者の場合は politeness(礼儀正しさ)というよりも、日本人とアメリカ人の「協調性」と「攻撃性」に焦点を当てているので、同じ年齢層の参加者を集めてグループを結成しようと考えている。世代間のギャップを取り払うことで、談話において日本人話者も率直な話し方をするを意図している。

そういう点で、申請者の学術的特色は他の先行研究にはない独創性があると考えられる。談話比較の研究を通じて、日本人の会話と英語話者の会話の差異を把握することができれば、異文化間におけるコミュニケーションのギャップも解消できるだろう。また、英語教育においても、異文化理解の見地に立った授業にこの研究を役立てられるだろう。

		1	2	3			1	2	3
日本語	発言	304	240	182	英語	発言	259	177	174
	意見	43(14%)	60(25%)	65(17%)		意見	69(27%)	72(41%)	130(38%)
	あいづち	48	55	391		あいづち	22	50	342
	発話総語数	11299	10379	23540		発話総語数	5810	7791	10454

三回に渡る談話収録の分析結果の図

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	